

# 海上の道Ⅱ海縁ネットワーク論その二 ―移住開拓島の民俗学ノート(五)―

野 地 恒 有

\*前号(『日本文化論叢』第三号)よりつづく。

## 3

誘引する生物から媒介する生物へ―国分直一の「海上の道」論・異考

柳田国男の「海上の道」では、始原の時代に原日本人がタカラガイの引力に導かれて海を渡って来たというような移住を導く生物としてのとらえ方が、タカラガイ以外の生物について次のように指摘されている。

「鼠や渡り鳥や魚の群れなどは、地図を見たこともなく、地理の教育はまったく受けないにもかかわらず、結果だけから見

れば、たしかに移住をしている。……少し大きな生物の群れには、それぞれのモーゼがいたようである。彼らの感覚は鋭く、判断は早く、またそれを決行する勇気をも具えていた故に、是と行動を共にしておれば、百ある危険を二十三十に減少することとできたろう……」(柳田 一九七八・二三)

この移動を導く生物というとらえ方から柳田の「海上の道」を受け止めて展開したのが国分直一(考古学・民族学)である。国分の「海上の道」論は次の二つの想定の上に立っている。

「その一つは魚類や動物の回遊や動きが、狩猟・採集民を誘ったのではないかとする想定である。第二の想定は、魅力あるものの分布が見られる場合には、その分布を追うことによって移

動が行われるとするものである。柳田国男先生がタカラガイをとりあげたのは、そのような想定に立たれたものであろう。：牧草が分布しているから、その分布を追って牧人は移動する。回避魚や移動する海獣は動く牧草なのである。」（国分一九七六・六三。国分「一九七六」の初出は一九七五年。引用部分は初出後に加筆された。国分「一九七六」と国分「一九七八」は同じ内容。）

国分は一九七五年以来、移住を導くモーゼとしての生物というところえ方にもとづいた「海上の道」論を、くり返し述べてきている。その生物として具体的には、海獣類、サケ・マス、ボラ、トビウオ、南海産貝類、海蛇があげられている。その一例として、移動を導くトビウオについてみると、次のような指摘がくり返されている。

「トビ魚は比較的ゆっくり北上するので、その動きを追うと、新しい島に導かれることがあったであらう。南方のヤミ族をして、バターンの祖地からバシーを越える機縁をえさせたのは、トビ魚（ヤミ族のいわゆるアリバンバン）であったと考えてよからう。」（国分 一九七二・四〇〇）

「蘭嶼のヤミ族がバタン島から渡来したことは疑いえないが、ヤミ族をして海峡を北上せしめた誘因となったものとしては、

トビウオ以外には考え難いように思われる。」（国分一九七六・五三）

「ヤミ族はアリバンバン、すなわちトビウオを追ってバタンから紅頭嶼に入ってきていることは間違いないことでありましょう。沖縄の漁人は……八重山から五島にかけて、とくに琉球諸島のいちばん先端までトビウオを追つかけるそうであります。……糸満はかつて隠岐島あたりにコロニーを作っていた。」（国分 一九八〇・二六三）

そして、一九九二年の『北の道 南の道―日本文化と海上の道―』では、その第一章が「なにが人びとを海に誘ったか」と題されて、そのはじめには「意に任せえない漂流となる場合以外に」季節風と海流を利用して、たくましい意志力によって、海上を移動したことも限りなくあったはずである。しかしそのような時には、必ず人を海に誘ったものがあつたにちがいない」（国分 一九九二・六）と述べている。そして、これまでと同様の内容がくり返されているけれども、これまでとは異なるのは、「しかしながらはつきりわかっているのは、蘭嶼のヤミ族がバタンから北上して、現在の島嶼に移動したことで、ヤミ族の祖先が台湾東海岸南部地区および、台湾沖の火烧島との折衝をもつていたことだけである」（国分 一九九二・八）という内容が付け加えられ、移動とトビウオとの結びつきがかなり弱められて結ば

れているところである。結局、トビウオと人の移動とが結びつきえた具体的な事例は見出されなかったというのである。

私自身の調査や管見によっても、トビウオを追いかけた末に移住が引き起こされたという事例を取り出すことはできない。たとえば右に上げた引用箇所の中で、沖縄の漁人がトビウオを追いかけて、隠岐島には糸満漁民が作ったコロニーがあったことを述べているが(国分 一九八〇・二六三)、筆者調査によれば、確かに糸満漁民は隠岐島まで出漁しているが、それはトビウオを追いかけてトビウオに誘導されたというわけではなく、また、そこに移住集落が形成されたのでもない。国分が「海上の道」論でとりあげた生物の中で、人の移動と結びついたという事例が見出されるのは、わずかに『北の道 南の道―日本文化と海上の道―』でふれられた「イカの道」ぐらいであろう(それまでの国分の「海上の道」論ではイカについてはふれられていなかった)。しかし、イカの動きと人の移動との結びつきが具体的にとらえられるのは近世以降のことである。一九七五年に国分により提起された想定は、一九九二年に至っても想定のままに終わったといえよう。

国分は考古学・民族学の立場から民族起源論として巨史的に、移動を導く生物を想定して「海上の道」論を展開したのであるが、それに対して、私は、民俗学の立場から同時代史として微史的に「海上の道」論をとらえ、外部と結びつける生物、媒介とする生物という想定へ転換を図ることを提起する。たとえば、

このことをトビウオを例に説明すると、一九六〇年頃に山口県見島を訪れた宮本常一は次のような聞き書きを載せている。

「かつての大和の売薬商人がこの島にやって来たとき、アゴ(トビウオの方言)を見て、大和ではこれがなくては盆がすぐせぬと言ったので、見島の人たちは自分らのとった魚が遠く大和山中で食べられていることを知っておどろいたという。」(宮本 一九七四・二三六)

一九二〇年代の頃、見島のトビウオは大阪の仲買人によってさかんに買われていたり、トーカイセンという運送船で大阪に運ばれて行き、他方、近畿地方の山間部では、盆にはトビウオを贈答品としたり食べたりしていた(瀬川 一九七五・一七八―一七九、宮本 一九七三・三一八)。トビウオによって見島と近畿地方が結びつけられているのである。これが、外部と結びつけ、媒介とする生物(たとえばトビウオ)というところである。つまり、トビウオは海縁ネットワークを作り出す生物と言いかえることができる。

#### 4

「海上の道」を「青ヶ島還住記」で読みなおす

「海上の道」を微史的に展開させるといふ課題を柳田国男自

身の作品の中に求めると、「青ヶ島還住記」に突き当たると。柳田はそうは考えていなかったかもしれないが、「青ヶ島還住記」は「海上の道」の微史的把握版であると私はとらえる。

柳田の「青ヶ島還住記」は、一七八〇年の伊豆諸島青ヶ島の噴火、そしてその噴火によって八丈島に避難してきた島人が再び青ヶ島へ移住するまでの六四年間（一七八〇年～一八四四年）を、近藤富蔵の「八丈実記」を用いて青ヶ島住民と八丈島住民の関係をとらえた作品である。（六四年間のうち、八丈島における避難生活期間は一七八五年～一八三五年の五〇年間である。）「八丈実記」を用いての記述であるが、「青ヶ島還住記」には、移住のプロセスを微史的にとらえることによって考察していこうという、「海上の道」で見せた巨視的なとらえ方とは異なる柳田の研究態度―「海上の道」では消されてしまった研究態度―が見出される。

「青ヶ島還住記」の内容を年代により箇条書きに要約すると、次のようになる。その内容は、青ヶ島噴火から八丈島への避難、青ヶ島の名主三九郎時代ともいべき第一次還住期（失敗）、青ヶ島の名主次郎太夫時代ともいべき第二次還住期（成功）の三つに分けられる。

#### ①青ヶ島の噴火と八丈島への避難

一七八〇（安永九）年六月、第一回目の噴火

一七八一（天明二）年四月、地震、噴火。

一七八三（天明三）年二月、噴火。

一七八三（天明三）年二月、噴火。

一七八五（天明五）年三月、激烈なる噴火。

一七八五（天明五）年三月、青ヶ島の名主七太夫ほか七名、八丈島に報告、避難。四月一日、四五人避難。四月二十七日、一〇八人避難。ほか含め、合計二〇二名の脱出避難。

一七八七（天明七）年六月一〇日、島に渡り検分し山焼けは鎮まったと報告。

一七八八（天明八）年五月一日、島に渡り検分し帰帆届の提出。

#### ②第一次還住期（失敗）

一七八九（寛政一）年六月一六日、青ヶ島の名主三九郎、青ヶ島実地検分し、同月二日八丈島に戻る。

一七九二（寛政四）年四月二五日、名主三九郎、青ヶ島実況検分、耕作の試みを願ひ出る。

一七九三（寛政五）年七月一二日、名主三九郎、一九人とともに穀物農具を積んで三回渡島、小屋掛けをして一二人の者を残し、名主ら八人は八丈島に帰島。

一七九三（寛政五）年八月、青ヶ島から八人の者、種穀不足により八丈島に帰島の途中に遭難、行方不明。

一七九四（寛政六）年四月、食料を積んで渡島、青ヶ島について大時化に遭い二艘の船は流失。同年六月、焼灰に埋まった

家作を掘り起こし、農具を釘に打って小舟を作り、一三人八丈島に戻る。

一七九四（寛政六）年七月、船頭彦次郎食料を積んで渡島、房州に漂着。

一七九四（寛政六）年九月、食料船一艘渡島、無事青ヶ島に到着、翌年八丈島に帰島。

一七九五（寛政七）年二月、渡島、遭難、八人全員溺死。

一七九五（寛政七）年四月、渡島、無事渡島、同年六月八丈島に帰島。

一七九六（寛政八）年四月、食料船一艘渡島、房総半島に漂着。

一七九七（寛政九）年七月二十九日、名主三九郎一家（八丈島避難後に生まれた幼い童児を含む）をはじめ男女二四人渡島、紀州熊野灘二木島に漂着。漂着先にて一人病没（名主三九郎の悲痛なる最後）。八丈島に戻ったのは男二人のみ（女一人は江戸に送られそのまま留まる）。（\*橋南谿『西遊記』続篇・「オガ島」にも記載あり。）

一七九九（寛政一一）年九月四日、男女三三人穀類を積んで出帆、紀州洲浦に漂着、翌一二年五月、全員江戸経由で八丈島に戻る。青ヶ島還住の計画の頓挫・中断。

一八〇一（享保二）年六月八日、寛政五年以来、青ヶ島に渡っていた七人の者、焼け残りの家作をもって小舟を作り、八丈島に戻る。

一八〇三（享保三）年五月、検分、青ヶ島無人無毛の地。

一八一（文化八）年、御普請役八丈島に出張し、青ヶ島起し返しの問題を取り調べるも、再度の開発の沙汰なし。青ヶ島還住の計画の頓挫。

### ③第二次還住期（成功）

一八一七（文化一四）年、八丈島に避難する「青ヶ島人の寄留者」、一七七人。

一八一七（文化一四）年、名主次郎太夫による開発の願い出が江戸表に取りあげられる。綿密な復興計画のもと、二〇名の先発隊が渡島。

（\*一八二七（文政一〇）年夏、「八丈実記」の著者・近藤富藏が八丈島に流されてくる。）

一八三四（天保五）年、一通りの開発を終え、避難の「青ヶ島人の全部は故土に」帰還する。

一八三五（天保六）年、検地。青ヶ島の人口、男一三三人女一〇八人、合計二四一人。

一八四〇（天保一一）年、青ヶ島の人口、二八八人。

一八四四（天保一四）年六月、「青ヶ島復興の完了し」、天保一五年、伊豆御代官により名主次郎太夫の表彰。

一八五二（嘉永五）年、「青ヶ島のモーゼ」とも言える次郎太夫死去、享年八四歳。

## 絹とカツオ節

「青ヶ島還住記」について、柳田が「八丈実記」のどこに注目して、何をインデックスとして読み解いているかを見ることは、「海上の道」を微史的にとらえ直すための視点を引き出すことにつながる。そして本稿では、柳田の読解のインデックスとして「カツオ節」がくり返し見出されることに注目する。

まず、青ヶ島のカツオ節について次のように書かれている。

「青ヶ島では―この括弧は引用者注を示す、以下同じ」島が平和の年ですらも、外へ持ち出し得るものはわずか絹糸か、鰹節の他には何もなかった。」（柳田 一九八九・五八五）

これは、次のように言いかえられる。青ヶ島において海縁ネットワークを作り出すものは絹糸とカツオ節の他には何もなかった、と。しかし、絹糸の方は、青ヶ島において海縁ネットワークを作り出すものとしては問題があった。次の文章を読んでみよう。

「青ヶ島は八丈から南や東へ三十六漚、十五里近くも離れているけれども、他には隣もないので夙から八丈の属島であった。村に名主だけは独立して置かれていたが、八丈の地役人が伊豆御代官の命の下にこれを支配し、貢物の絹を取り次いだのみならず、島には機を織り糸を染める者がないので、白糸

を持参して八丈の女たちに織ってもらって納めていた。その糸さえも足らぬ場合には、鰹節などを八丈に送って来て、これを取った糸に交易したということで、つまりは他に掛替えのないたった一つの取引先であったのである。」（柳田 一九八九・五六五）

青ヶ島にとって、外社会として海縁ネットワークを結ぶ先は八丈島だけであった。そして、両者の関係は青ヶ島が八丈島に属する従の関係であった。なぜなら、青ヶ島に名主は置かれていたが、その支配は八丈島の地役人が伊豆御代官の命の下になされていたから。また、青ヶ島には機を織り糸を染める者がいなかったもので、白糸つまり絹糸を持参して八丈島の女たちに織ってもらって年貢として納めていたことからである。それらの意味で、青ヶ島は八丈島の属島であった。

絹糸は八丈島に依存しなければ生産できなかった。しかも、その絹糸さえも足りないときには、カツオ節を八丈島に送って、絹糸と交換したという。絹織物は青ヶ島単独では作ることができなかった。その点で青ヶ島は八丈島に属していた。それに対して、カツオ節は八丈島に頼らずに製造することができた。青ヶ島にとって、カツオ節だけは八丈島に依存せずに海縁ネットワークを作り出せるものだったのだ。その点では青ヶ島は八丈島に属していなかった。

青ヶ島にとつてのカツオ節の重要性は次のような箇所でもと

らえられている。一八一七（文化一四）年、名主次郎太夫による開発の願い出が江戸表に取りあげられ、名主次郎太夫が復興計画を立てる中で、帰島後の「規約」を定めた。その中で、カツオ節に関する条があった。

「〔その規約が用意周到だったことは以下のとおり〕鰹節の貯蔵に及び、他の漁獲物は勝手に処理してよいが、鰹節ばかりは向う三ヶ年の間、これを島中に囲って置いて、いっさい隠し積み等をしてはならぬ。その禁を犯した者は罰を受け、かつ品物を取り揚げると厳命している。これは必ずしも食料の欠乏に備えるだけでなく、実は以前からこれが青ヶ島の貨幣でもあったからで、これを統制管理することが、自然に各人に私を営ませず、力を公共の目的に尽させる結果にもなったのである」（柳田 一九八九・五九五）

カツオ節は青ヶ島にとって八丈島に対して通用する貨幣であった。カツオ節は、八丈島に依存せずに生産できるもの、八丈島との交易を可能にするもの、そして青ヶ島の自立を保証するものであった。

還住後の生活においても、「年貢の絹の納付は、……天保四年からいうことに定められて、……〔その〕絹は桑を栽える余地がまだないから、八丈に頼んで織立ててもらうことにした。その代償はおそらく鰹節であった」（柳田 一九八九・六〇一）

六〇二）と柳田がとらえているように、還住後の生活再建、維持においても、カツオ節は重要な役割を持っていた。

定住生活を成立させるためには、よそに頼らずに自ら海縁ネットワークを作り出す手だてを持っていたことが必要なのである。青ヶ島にとって、それがカツオ節であった。

### 橘南谿の批評

一七九七（寛政九）年七月二十九日、名主三九郎一家をはじめ男女一四人が青ヶ島に出帆したが、難船して、紀州熊野灘二本島（三重県熊野市）に漂着した。その漂着先で彼らの手当に当たった医者から聞いた話が、橘南谿の『西遊記』続篇（一七九八「寛政一〇」年刊行）に載っている。それを柳田は「青ヶ島還住記」の中で取りあげている。そこで、その部分を『西遊記』続篇から見よう。その条の題目は「オガ島」（青ヶ島のこと）となっている。

「一島皆焼はてたる跡へ、年経て只一家のみ帰て、何をなして世のたづきともし、又何を楽しみとせんとや。いかにふるさと恋しければとて、数百里はなれたる沖の小島に、人もなく、牛馬も無きに、我家内ばかり帰り住たく思ふは、外よりはいと不審なる事也。其上又いつか焼出んもはかりがたきに、あわれなるは人心なりけり。」（橘 一九七二・一二二～一二三）

南谿の「外よりはいと不審なる事……あわれなるは人心なりけり」といった批評に対して、柳田は「南谿には」まだ一行の人々の心持ちがよく飲み込めなかつたのである。名主三九郎が生きていて述懐をしたならば、今少しは同情のある批評も下されたこととも思う（柳田 一九八九・五九二）とコメントしている。しかし、八丈島から漂着した一四人のうち、結局一人が亡くなり、名主三九郎一家はほぼ全滅、その中には避難後に八丈島で生まれた幼子も含まれていたという、その悲惨なる状況を聞くにつけて「外よりはいと不審なる事……あわれなるは人心なりけり」という批評も、もつともであり、柳田のコメントしたような帰郷の意志を理解しない同情心のないものともいえないように思える。

それでも、私にとつて「不審」と言うか驚くべきことは、一八三四年、八丈島に避難していた「青ヶ島人の全部は故土に還」つたことである。（一七八五年の避難者数は二〇二、その五〇年後の一八三五年、青ヶ島の帰島者数は二四一であった。）南谿の言を借りれば「いかにふるさと恋しければ」とはいえ、皆焼はてたる跡の「人もなく、牛馬も無」く「又いつか焼出んもはかりがたき」、「数百里はなれたる沖の小島」に、避難生活も約五〇年がたち、世代も代わり、八丈島が第二の故郷となっている者や八丈島生まれの者もいるだろうのに、避難した「青ヶ島人の全部は故土に還」つたという事実にある。これは、「ふるさと恋し」の望郷の念だけでは説明できない。五〇年後の青ヶ

島避難民たち全員をして帰還に導かした原動力は何に求められるのであろうか。

八丈島に避難する青ヶ島の「寄留者」は、帰島一七年前の一八一七（文化一四）年には一七七人であった（柳田 一九八九・五九二）。そして、一八二七（文政一〇）年ごろ、八丈島における青ヶ島島民の避難生活の状況は次のようなものであった。

「島では南の浜に面した大賀郷の地内に、流人とは別に十数戸の小屋を掛けて、見すばらしい暮しを立てている半農半漁の居住民があつた。三根末吉などの村にも分けて一二軒、あるいは土地の物持ち衆の家に、かかり人のようになって同居する仲間も若干はあつた。」（柳田 一九八九・五六五）

こうした青ヶ島島民たちを帰還に導いた主たる原動力を、私は、おそらく避難後五〇年たつても変わらなかつたであろう八丈島における「寄留」という地位からの脱出であつたと考えている。そして、その帰還を可能にした一つの要因は、青ヶ島の生活再建（遷住生活の形成）において、確固とした「世のたづき」を持っていたからであろう。「世のたづき」とは、南谿の批評の中に「何をなして世のたづきともし」と出ている言葉である。「世のたづき」とは単になりわいという意味ではなく、島を外社会と結びつける手だてといった意味であろう。私の言



葉で言えば、海縁ネットワークを作り出す手だてということになる。青ヶ島の「世のたづき」とは、すなわちカツオ節製造の技術である。カツオ節製造の技術を持っていたから定住生活を構築することができたのである。

予想するに、そのカツオ節製造の技術は、寄留である彼らには八丈島では発揮できず、青ヶ島でなければ発揮できなかったのだらう。なぜなら、八丈島ではカツオ節製造のための燃料が確保できなかったから。カツオのような漁獲物は寄留でも手に入れることはできたであらう。しかし、カツオ節製造には燃料、つまり共有山林の薪が必要であった。その共有山林の薪を、八丈島の寄留であった彼らには採取することができなかったのである。カツオ節は、彼らにとって燃料の確保できる、いわゆる「本戸」として共有山林を使用する権利のある青ヶ島でなければ製造できなかったのである。

カツオ節製造の燃料に関連して見ると、還住後の新事業として「二箇所の塩釜」を設置し、「塩を焼く計画」があげられているが（柳田 一九八九・六〇〇）、それもその燃料を生かした、海縁ネットワークを作り出すための新事業であったといえる。

「海上の道」のタカラガイは「世のたづき」（海縁ネットワークを作り出すもの）を象徴的にあらわしている。青ヶ島では、いわばカツオ節がタカラガイなのである。しかも、青ヶ島のカツオ節製造から見たように、その海縁ネットワークは自力で、他に依存せずに作り出されなければならないといえる。絹製品

のように八丈島に依存しなければ生産できないようなものは、還住生活を安定させるための海縁ネットワークを作り出すことはできない。定住生活を構築するための海縁ネットワークは、自力で他に依存せずに生産あるいは発信できるものによって作り出されなければならないのである。

#### （附記）海島の不安

国分直一の「海上の道」論の中に、「海島の不安」という一節がある。そこでは、鹿児島県徳之島において一五世紀頃に船の描かれた刻画のモチーフから、次のような指摘がなされている。

「徳之島のいずれの刻画においても、執拗な矢と巨鯨の表現のあることには、外来の侵入者への拒絶的思想が表現されていると見るべきではなからうか。来航したものが、たとえ侵入者でなく、水などを求めて接島することがあったとしても、言語の不通である場合には、警戒的拒絶的感情へと島民をかり立てる場合があったとしても不思議ではないように思われる。」（国分 一九九二・一七五）

島嶼社会が外社会とつながることは、定住生活の持続のために必須であるけれども、同時にそれは外来の侵入者をももたら

す。海縁ネットワークの形成は、島嶼社会にとってプラスとマイナスの諸刃の剣なのである。しかし、だからといって、外とつながることに対して「拒絶的思想」や「拒絶的感情」へと「島民をかり立てる」、つまり、外社会とのつながりを拒絶することにはならないと私は考える。島の生活が外社会につながっていることは定住の安定に必要である。しかし、そこには海賊やネズミのようなマイナスの移入も含まれている。そうした海縁ネットワークがもたらすアンビバレントな状況こそが海島の不安なのである。

## 【引用・参考文献】

- 国分直一 一九七二 「糸満の世界」『日本民族文化の研究』慶友社
- 国分直一 一九七五 「海上の道―海流・季節風・動物をめぐって―」『えとのす』二 新日本教育図書
- 国分直一 一九七六 「海上の道―海流・季節風・動物をめぐって―」『環シナ海民族文化考』慶友社
- 国分直一 一九七八 「海上の道―海流・季節風・動物をめぐって―」国分直一（編）『論集海上の道』大和書房
- 国分直一 一九八〇 「日本基層文化における南方的要素」『東シナ海の道―倭と倭種の世界―』法政大学出

## 版局

- 国分直一 一九九二 『北の道 南の道―日本文化と海上の道―』第一書房
- 瀬川清子 一九七五 『日間賀島・見島民俗誌』未来社
- 橋南谿 一九七二 「東西遊記」谷川健一（編）『日本庶民生活史料集成』二〇 三一書房
- 橋南谿 一九七四 『東西遊記2 東洋文庫二四九』平凡社
- 宮本常一 一九七三 「吉野西奥民俗探訪録」『日本常民生活資料叢書』一九 三一書房
- 宮本常一 一九七四 「見島の漁村」『宮本常一著作集』一七 未来社
- 柳田国男 一九七八 『海上の道』（岩波文庫）岩波書店
- 柳田国男 一九八九 「島の人生」『柳田国男全集』一（ちくま文庫）筑摩書房
- 本稿は、平成二五年度～平成二八年度科学研究費（基盤研究（C）「移住開拓島に構築される生業体系に関する民俗学的研究―定住化と無人島化の事例比較―」（課題番号二五三七〇九〇四）の年次報告（一部）である